

## フッセリアーナ第39巻『生活世界』についての報告 ——原創設、世界経験、方位付け構造、自然、実践——

山口 弘多郎  
(大阪大学)

### はじめに

本報告では、フッセリアーナ第39巻の概要を紹介しながら、数多くある論点からいくつかを取り出し、他のテキストと関連付けつつ問題提起を行いたい。

この第39巻には、表題が示す通り、生活世界概念に関連する遺稿がまとめられているが、この概念に関する著作や遺稿はこれまでに公刊されてきた。例えば、以下のようなものが挙げられるだろう。

第1巻『デカルト的省察』(以下、『省察』)

第4巻『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第2巻』

(以下、『イデーⅡ』)

第6巻『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以下、『危機』)

第8巻『第一哲学』

第9巻『現象学的心理学』

第11巻『受動的総合の分析』

第15巻『間主観性の現象学』

第16巻『事物と空間』

第29巻『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 補巻』

(以下、『危機』補巻)

第32巻『自然と精神』

第34巻『現象学的還元』

この巻数の多さからだけでも、生活世界概念の問題圏の広さが窺い知れるが、本報告の扱う第 39 卷は、これらの著作・遺稿にはない未公開のものを収めており、この問題圏がさらに広がることを教えてくれる。

それらのテキストは、編者ロフス・ゾーワ (Rochus Sowa) によって選ばれているが、彼はこの巻に収めるテキストを選択する際、次のような遺稿をまとめた束から集めている。

A-V 「志向的人間学 (人格と周囲世界)」

A-VI 「心理学 (志向性に関する教説)」

A-VII 「世界統覚の理論」

B-I 「還元への道」

D 「原初的構成 (原構成)」

K-III 『『危機』の問題に関する 1930 年以後の草稿』など。

特に、A-VII 「世界統覚の理論」から選ばれたテキストが多い。

ゾーワは、そうして集めたテキストを 10 の章にまとめているのだが、その編集の概要を掴むために、ここでは、彼の生活世界論を概観したい。第 39 卷の序論において、彼は生活世界概念史をまとめているので、それを 1910 年代、20 年代、30 年代の観点から整理しつつ、その要点を確認する。

まずは、エトムント・フッサールがゲッティンゲン大学にいた時期が中心となる 1910 年代から。ゾーワは、次の二点を指摘している。一つ目は、この頃にはすでに、生活世界という語そのものは用いられていなくとも、生活世界概念の萌芽があること。例えば、『事物と空間』では、事物と事物世界の構成が、身体によって方位付けられた仕方で遂行されることなどが述べられている。

二つ目は、この時期に、フッサールがリチャード・アヴェナリウスとヴィルヘルム・ディルタイの影響を受けていることである。アヴェナリウスに関しては、彼が 1891 年に発表した『人間的世界概念』を、フッサールが 1902 年に研究しており、そこから「自然的世界概念という理念」と「純粹で先入見のない記述という方法理念」という二つの理念を得ている (XXXIII)<sup>1</sup>。ディルタイに関しては、彼の『精神

---

1. 第 39 卷からの引用は、本文中括弧内にページ数のみを記載した。ただし編者による序論からの引用については、ページ数をローマ数字で表記した。他のフッセリアーナ (Husserliana) からの引用は慣例にしたがい、本文中括弧内に巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で表記した。

諸科学における歴史的世界の構成』を、フッサールが 1911 年に研究している<sup>2</sup>。その他の著書も合わせて研究しており、そうしたディルタイ研究が「生活世界の学の最初の試み」に決定的な影響を与えている。その試みとは、自然的世界を体系的に包括しながら、その広さと深さを汲みつくす仕方ですべて記述するというものである。

こうした二人の影響が、『イデーニ II』において、生活世界の学という理念の下で、結び付けられる。『イデーニ II』において、ディルタイによる生とその精神的歴史的世界への帰還と、アヴェナリウスによる自然的世界概念という眼前に見出されるものへの帰還が、前学問的に経験される世界に関して、志向的相関関係を追求する、アプリアーナ学という理念によって、結びつく（XLIII f）。

次に 1920 年代である。ゾーフは、この年代に、アヴェナリウスとディルタイの影響下において形成された生活世界とその学の萌芽が、超越論的感性論と結びついて発展したことを指摘している。1919 年夏に行われた講義「自然と精神」においてすでに、超越論的感性論という語が登場しており、そこでは、感性的直観の対象の超越論的体系であるカントの感性論に対して、フッサールは、経験世界のアプリアーナ学という意味で、その語を用いている。ただしこの時、この経験世界は物的自然、つまり純粋に感性的な直観の世界として限定されている。

このフッサールの感性論に関して、後に、1927 年の草稿において、『具体的な』経験世界、間主観的歴史的な実践世界へと適用される感性論が「真の超越論的感性論」とされ、感性論の範囲が拡大している（LII）。こうした広義の超越論的感性論と結びついて、具体的な経験世界（つまり生活世界）は、その構成的で非自立的な層や構造を明らかにされることを通して、再構成される。例えば第 39 卷の Nr. 26（1926 年）のテキストでは、生活世界の抽象的な核層としての自然が抽出されている。

最後に 30 年代を確認しよう。もともと生活世界概念が後期の代表的な概念であることから窺えるように、この年代に、生活世界の問題に関わる仕事をもっとも集中的に実り豊かに行われている（LV）。『危機』における自然科学と生活世界の関係という問題や、『間主観性の現象学』などで論じられる故郷世界と異郷世界の問題などが、ここに含まれる。ゾーフは、オイゲン・フィンクが作成した「フッサールの未完草稿に関する記録」に基づいて、この年代の仕事を次のように説明している。「主観的な所与の仕方の多様性における経験世界として、相対的な周囲世界的所与性の移り変わりにおける故郷世界と異郷世界として、前理論的な生活世界を解明す

---

2. フッサールとディルタイの関係および『イデーニ II』の成立については、榊原哲也『フッサール現象学の生成 方法の成立と展開』東京大学出版会、2009 が詳しい。

ることが、非常に多い草稿を包括する根本主題を表している」(LVI)。

ここまでゾーフによる生活世界の概念史を簡単に概観してきたが、彼の概念史解釈の特徴は、生活世界概念の発展を超越論的感性論の観点から考察するところにある。そのため、彼は、第 39 卷に収めるテキストを選択する際にも、超越論的感性論から規定可能な生活世界概念を基準にしている (LIX)。その生活世界とは、具体的な世界で、人格が日常的に生活する、伝統的な世界であり、人格やその共同体に対して妥当し、前もって与えられる世界である。こうした生活世界の多様な側面や次元が、10 の章としてまとめられているのである。

ここで注意しておきたいことは、この第 39 卷に収められているテキストは、生活世界の多様な側面からまとめられているのであって、年代順に並べられているわけではない、という点である。テキストの章分けも、各章におけるテキストの番号付けも、年代順ではない。そのため、テキストの分け方や順番には、編者であるゾーフの解釈が入り込んでいる。フッサールの文献研究として、この第 39 卷を用いる際は、その点に注意しておく必要がある。

また、冒頭でも述べたように、生活世界概念に関するテキストは、第 39 卷だけに限定されない。生活世界の問題圏は、様々な著作・遺稿にまたがって広がっているため、この第 39 卷だけに基づいて生活世界概念を論じることは難しい。そこで、本報告では、第 39 卷の I 章、II 章、III 章、V 章、VI 章から、主要なトピックを取り出し、その要点をまとめながら、既刊のテキストと関連付けつつ、どのような問題がありうるのかを模索してゆく。

## I 章「世界と前もって与えられる世界存立との前所与性」について

章題が示すように、この章では、生活世界の前所与性に関するテキストが集められている。前所与性という言葉で最初に思い浮かぶことは、『危機』における議論だろう。そこでは、数学化や理論化などの学問的営為に先立って、生活世界が前もって与えられていることなどが論じられている。

『危機』は 30 年代のテキストだが、この章に収められているテキストは、主に 20 年代のものが中心になっている。20 年代は、フッサールが発生的現象学を形成しつつある時期であるため、ゾーフは、生活世界の前所与性と発生的現象学の関連性を指摘している。そこで本報告では、発生的現象学の概念の一つである「原創設 (Urstiftung)」に焦点を当てて、その内容を見ていきたい。最初に、第 39 卷の概要

をまとめ、最後に他のテキストとの関連性を確認する。

この第 39 巻に収められたテキストで、フッサールが原創設という概念を用いて記述を試みる事象は、事物の統覚である。

ある作用を遂行している時、遂行している私に対して、存在者は主題的に与えられ、顕在的な妥当の内にある。たとえ別の存在者に関心を向け、その存在者が主題的でなくなったとしても、その妥当は継続している。例えば、読書をしている時、私に対して、本は主題的に与えられ、その存在妥当は顕在的である。そこに鐘が鳴って、時計に目を向け、本から関心を反らしたとしても、本の存在はまだ妥当したままである。「最初の妥当が、継続妥当の地平を創設するのである」(1)。ここには、以前の作用を再活性化する可能性が属している。例えば、鐘の音を聞いて、学校の授業が始まったと知り、本を置いて、場所を移動し、授業後、元の部屋に帰ってきて、自分が置いた場所に本があった場合、その本の存在妥当は再び顕在的になる。この可能性は、空虚なものではなく、「意識生の根本特性」である (2)。

この作用の特性と原創設は類似している。原創設は、新しいもの、つまり、まだ一度も出会っておらず、何らかの継続妥当の内にはない存在者をはじめて創設する作用である。この原創設において創設された存在者は、以後の経験に影響する。例えば、はじめてヤシの実を見た時の経験は、次にヤシの実を見た時、その実は個別的には未知のものではあるが、まったく新しいものとしてではなく、一つの既知のものとして捉えられる。このことをフッサールは、「どの『統覚』も、それがヤシの統覚であれ、テーブルの統覚であれ、人間の統覚であれ、空間物体としての事物一般の統覚などであれ、その起源を、その類型に応じた原創設を持つ」(3) と記述している。もし一度も物を見たことがなく、物という意味をまったく持っていないとしたら、新しいものを物として統覚することも、物という類型的意味地平を持つこともできない。これは、原創設における妥当が、以後の経験においても継続して妥当していることでもあるだろう。

この継続的な妥当は、「習慣的妥当 (*habituelle Geltung*)」として保持され続けるが、「妥当のうちにある思念は、それと内容的に対立する、同等かそれ以上の妥当の力によって、その力を奪われることもありうる (様相化しうる)。そして、疑わしくなったり、その妥当において打ち砕かれたりしうる」(47)。例えば、初めて海外を訪れた時に原創設された妥当が、十数年放置され、二度目に同じ場所を訪れた時、その様子がガラリと変わっていれば、原創設からの継続妥当はその力を失い、また新たに創設されることになるだろう。反対の場合もありうる。同じ場所だと思っていたところが実は勘違いで、改めて、十数年前に訪れた場所へ行くと、その様子が変

わっていないければ、原創設は力を取り戻す。したがって原創設の妥当は、それ以後の経験において継続的に機能するが、それは修正可能性も復活可能性も排除するものではない。

また、存在者が与えられる時、自立的にそれだけが与えられるわけではない。存在者は内的地平と外的地平を持っており、「ある『存在者』が外的地平を持つやいなや、その存在者はそれだけで定立されるのではなく、他の存在者たちと共に定立される」(5)。つまり、外的地平を持つ存在者は、非自立的であり、他の存在者との関係のうちに存在しているのである。例えば読書の時、私の関心が本に向けられていても、本だけが定立されているのではなく、他のページに挟まれた栞や、傍にあるテーブルや、部屋の壁にある本棚などと共に定立されている。ここから、存在定立は、「関係づける定立 (In-Beziehung-Setzung)」とも言われている。(5)。

第 39 卷の内容を概観できたところで、他のテキストの関連を考察したい。ここで注意したいことは、原創設という語が用いられていたとしても、決して同じ事象が記述されているわけではないという点である。フッサールは、原創設という同じ語を用いても、テキストや文脈によって異なる事象を記述している。

第 39 卷の内容と同類の事象を扱っているテキストは、『省察』である。「統覚はすべて、類似の意味を持った対象が初めて (erstmalig) 構成された原創設を志向的に遡示している」(I,141)。ここでは、ある対象が初めて構成された場面が、原創設と呼ばれている。

他方、第 39 卷と異なる事象を扱っているテキストが、『第一哲学』と『危機』である。『第一哲学』では、「哲学者には、己を哲学者一般として初めて根源的に創造する決断、いわば、根源的な自己創造である原創設が必要である」(VIII,19) と書かれていることから、原創設という語が、哲学者の自己創造の意味で用いられていることがわかる。ここでは、哲学を自身の生の最終目的とする決断こそが、その決断者を哲学者にするという文脈で、この語が用いられている。

また『危機』でも、哲学に関する議論が行われている。ここでは、哲学という学問が最初に創設された場面に対して、原創設という語が登場する。「すべての原創設には、本質的に、歴史的過程に課せられている究極的な創設 (Endstiftung) が属している。その課題が完全に明らかにされた時、この究極的な創設は遂行される」(VI, 73)。フッサールは、哲学が最初に創設された時点で、哲学が最終的にどのように創設されるべきかが示されており、哲学の歴史をこの最終創設の実現へ向かう道程として捉えることができると考えているのである。

しかし、『危機』における原創設の議論はこれだけではない。「幾何学の起源」で



は、幾何学および幾何学的対象の原創設が論じられる。「私たちの幾何学、もしくは伝承されている古い形態（ユークリッド幾何学のような）から出発して、幾何学が『原創設的なもの (urstiftend)』として必然的にそうであったに違いないような幾何学の沈下した起源的端緒を遡及的に問うことが必要である」(VI,366)。ここで問われている起源的端緒とは、幾何学の最初の成果を獲得した創造的活動のことを意味しており、幾何学の原創設へ遡及することは、その活動が何であったのかを明らかにすることである。この遡及的な問いは、実際には、『危機』の第 9 節で行われており、幾何学の最初の創造的活動は測定術であるとフッサールは論じている。学問の歴史を遡及するという点では、哲学の歴史と共通しているが、哲学の歴史の方は目的論的な意味合いが強いのに対して、幾何学の歴史の方はその意味合いが出ていない。

以上のように、フッサールが原創設という語を用いて記述しようとする事象は複数ある。そのため、この語が用いられる文脈を整理し、各文脈における原創設の射程を把握しつつ、これらの事象の関係性がどうなっているのかが、問題の一つになりうるだろう。

## II 章「世界経験と世界における実在の経験との地平構造」について

この章では、30 年代を中心に、生活世界の地平性に関するテキストが収められている。この地平性という観点から、実在経験と世界経験が対比され、その違いが考察されているので、本報告では、そこに焦点を当てていきたい。

まず実在経験について。個々の実在を経験する際、「どの実在的なものの存在も、予料を通した存在であり、そのつどの所与性からなる存在である」(67)。経験は射映構造を持つため、どの実在を経験する際も、その実在には、その時与えられている側面とそうではない側面がある。この与えられていない側面の方に関しては、例えば、銀色のカップを見ているとしたら、裏側も銀色だろうといった予料が行われている。そして、前章でも少し触れたが、どの実在も内的地平と外的地平を持つ。この外的地平を持つということは、「規定的あるいは未規定的な、現実的あるいは可能的な、他の実在からなる周囲」(68)を持つことであり、さらに、世界という全体性の地平を前提していることでもある。

この実在経験のあり方には、二つの潜在性が属している。一つは、経験している当の実在を、真理という全体性において、その真の存在を規定するという潜在性で

ある。その実在の経験が進行し、より詳細に内的にも外的にも規定が深まり、「等々 (Und-so-weiter)」と締めくくられることによって、当の実在に、「その規定の全体的な無限性の基体という論理的形式」が生じる (68)。つまり、実在は、その規定の論理的な基体になる。もう一つは、当の実在から離れ、周囲にある他の実在に移り、それを規定し、形成するという潜在性である。

次に世界経験についてだが、この経験は、実在経験と同じようなものではない。フッサールは、「世界の所与に、個々の実在の所与が先行する」(68)と述べている。ここに、上記の二つ目の潜在性が関係してくる。つまり、ある実在からその周囲の他の実在へ、さらには、新しい周囲とその実在へ移行することにおいて、「総合的な経験 (synthetische Erfahrung)」が遂行される。この移行は「見渡す (Sich-Umschauen)」といった仕方で行われ、この総合的な経験において、どの周囲も新しい周囲の地平を持つ。こうした総合的な経験として世界経験は規定され、この総合的な統一性が実在経験との相違点になる。

この世界経験のあり方には、実在経験とは異なる一つの潜在性が属しており、それは論理的な理念としての世界という理念を構築する潜在性である。論理的な基体としての実在から出発し、他の実在を集め、結び付け、「等々」と締めくくることによって、最終的にはすべてのものがここに加わり、全体性としての世界という理念が形成されるのである。

ここで注意すべきことが二つある。一つは、「論理的」という語の意味である。ここでのこの語は、学問分野の論理学という意味ではなく、「概念的 (begrifflich)」と言い換えられるものとされている (69)。概念的に捉えることには、言語で捉えることも含まれるので、世界を「世界」という言語で表す時、そこに全体性という理念があると考えられるだろう。もう一つは、実在と世界の関係である。実在は外的地平を持ち、世界という全体性を前提している。他方で、世界という全体性は、個々の実在から他の実在へ移行する中で形成される。つまり、どちらもお互いを前提としている。この点をフッサールは指摘している。「この無限性は矛盾を備えている。(中略) 実在という全体概念は世界という概念を前提しており、逆に世界という概念も実在という概念を前提にしている」(70)。この矛盾の解消に関する詳細な議論を行っていないが、この点は注意しておくべきだろう。

ここで、以上の議論における「論理的」という点に着目したい。実在も世界も、前論理的な段階から「等々」といった仕方によって論理化されている。フッサールはこの論理を概念として規定しているが、議論の内容からは、無限性という特性を備えている。この無限性に関して、他のテキストにも言及がある。



『危機』補巻において、数学化に先立つ理念化として世界の無限化が記述されている。「私たち現代人が『世界』という用語を使うやいなや（学問的な構築をおしつけない）、すでに私たちの背後に最初の理念化がある」（XXIX, 140）。この最初の理念化が、古代の世界概念と現代の世界概念の対比を通して、無限化と特徴づけられる。さらに、この無限化を促すものとして、二つの理念化が登場する。それは、「方位付けられた直観的な事物世界の中をあらゆる方向に動く」という能力の理念化と、「繰り返し事物と出会うだろう」という経験の理念化である。両テキストの無限化には、身体性との相関性という共通点がある。第 39 卷のテキストでは、「見渡す」という視覚的な運動が挙げられる程度で、身体性との相関性は前面に出ていないが、『危機』補巻のテキストでは、その相関性が明確に表れている。世界という理念は論理的あるいは概念的と特徴づけられており、一見、身体性と関係ないように見えるが、この理念形成において身体性が深く関係していることは重要なことであるように思われる。

フッサールはこの無限性という特性を、世界だけではなく、学問にも見出している。『危機』の前身となるウィーン講演において、「学問は、課題の無限性という理念を意味する」（VI, 323）と述べており、学問の課題が無限であると特徴付けている。この時の学問には、哲学も自然科学といった個別的学問も含まれている。学問がその問いを向ける先が世界であるなら、世界の無限性と学問の無限性は無関係ではない。ただ、この二つの無限性の関係は、数学的対象の同一性などが関わってくるため、身体性との相関だけでは説明できない、より複雑な関係になるだろう。

また『自然と精神』において、フッサールはリッケルトやヴィンデルバントの学問論を批判しているのだが、リッケルトの自然科学論を説明する際、無限性という語を使用している。「彼〔リッケルト〕は、与えられる世界とその包括的な無限性と内包的な無限性から出発し、認識はこの両方の無限性をどのように克服すべきかと考えている」（XXXII, 88）。この「包括的な無限性」は、私たちの目の前に様々な対象が存在するという種的多様性を、「内包的な無限性」は、個々の対象が内包する性質的な多様性を意味している。つまり、ここでの無限性は無限の多様性という意味で使われている。この多様性が、法則の認識によって克服されるのである。しかし、フッサールの場合にはむしろ逆である。学問は、認識の相対性を克服して、万人に対して妥当する認識を獲得し、無限の課題という無限性に到達するものとして記述される。このように無限性概念には多義的な側面があるため、その整理が必要になるだろう。

### III 章「生活世界の方位付け構造と生活世界的な状況性の根本構造」について

この章では、生活世界が、身体的に経験する主観を中心に方位付けられた周囲世界として、そのつどの具体的な状況において与えられるという方位付け構造が主題になっている。また、この方位付けの仕方に関して、個別主観的な仕方と間主観的な仕方の区別がなされているので、本報告ではここに焦点を当てて、内容を概観したい。

方位付けという観点から世界の所与性が記述される際、次のようになされる。「世界は方位付けられて与えられる。私は近い領野と遠い領野を持ち、近くゼロ対象として自分の身体を持つ。この近さそのものが再び方位付けられ、さまざまな意味に対して異なる」(145)。自分の身体を中心に遠近という仕方方位付けられ、世界が与えられるわけだが、この遠近の方位付けは固定的ではなく、接近という実践に応じて流動的なものである。私が移動することによって、近いところは遠いところになり、反対に、遠いところが近いところになる。つまり、接近によって方位付けが繰り返される。I 章において、存在者は単独で定立されるのではなく、他の存在者との関係において共に定立されることを見たが、これらの存在者は、この方位付け全体の統一において秩序づけられている。第 39 卷では、遠近という方位付けの記述が中心的だったが、方位付けには、前後、左右、上下などの様々な仕方があり、各方位付けに対応する実践がありうるだろう。例えば、前後の場合、身体の向きを変えるなどの実践に対応する。

存在者の内には、事物だけではなく、他者も含まれている。この時、「私は、他者に入り込んで理解することによって、彼を方位付けられた世界としての彼の周囲世界のうちで理解する」(147)。逆も同様である。彼は、私を私の周囲世界のうちで理解する。この相互理解から、私も彼も、方位付けの仕方は異なるが（例えば、私の左側は、彼にとって右側になる）、同じ方位付け体系を持った同一の世界の主観として、一つの共通の実践的周囲世界を共有するようになる。

フッサールは、個別主観的な方位付けから間主観的な方位付けへ議論を進めることによって、間主観的に方位付けられた世界を文化的な周囲世界として記述しようとする。この文化的な周囲世界は、その中心である「私たち (Wir)」の段階（例えば、家族、民族、国など）に応じて様々だが、「故郷世界」として、異なる人たちの周囲世界である「異郷世界」と共に取り上げられ、異郷世界の理解可能性といった問題の考察に用いられる。

この議論の進行において身体はどうなるのであろうか。個別主観的な方位付けで

は、私の身体が中心となり、世界が遠近といった仕方で方位付けられる。では、間主観的な方位付けにおける身体は何なのか。フッサールは、「私たちは、その共同的な身体性 (kollektive Leiblichkeit) を持つ」(181) と述べている。つまり、個別主観的な方位付けと私の身体の関係と類比的に、間主観的な方位付けでは、私たちの身体が中心になるのである。この共同的な身体性は、個別主観的な方位付けと類比的に考察されており、この身体性は私たちがいる位置であり、「領土 (Territorium)」であると規定されている。「私も誰もが、空間時間性において、その『位置』を持っている。その位置から、その人は周囲世界としてその人の方位付けられた世界を持つ。そして、私たちの共同体 (Wir-Gemeinschaft) で構成されるどの私たちも、その私たちの位置 (Wir-Stelle) —その領土—とその周囲世界を持つ」(181)。

第 39 卷に限らず、方位付けに関する記述は、さまざまなテキストで行われている。ゾーワが指摘したように、『事物と空間』では、個別主観的な方位付けに関して、眼球運動など詳細な記述が行われている。『イデーニ II』では、それに加えて、意思疎通的な (kommunikativ) 周囲世界などの間主観的な周囲世界が記述されている。さらに『間主観性の現象学』でも、この世界に関する議論は共同体論として引き続き扱われている。この大きな流れは、「私 (Ich)」から「私たち (Wir)」への流れ、言い換えれば、一人称単数から一人称複数への流れと捉えることができるだろう。第 39 卷に収められたテキストも、この流れから逸れるものではない。

ただ他方で、第 III 章のテキストは 30 年代に書かれたものが中心であるため、フッサールが当時置かれていた時代状況の影響も窺える。特に、間主観的な周囲世界の記述において、「民族 (Volk)」という観点から記述したものが多く、(もちろん民族だけではなく、家族や都市、国の記述もあるが) そして、私たちの位置を、「領土」という語で表し、共同的身体性と捉える点などに、時代の影響が見え隠れしている。この時代状況との関係性をどこまで強くとするかは、一つの問題になるだろう。しかしながら、「領土」という概念は私たちの位置を意味するにすぎないのだから、「私たち」の段階に応じてその内実が変わる。私たちが家族であれば領土は家を、企業であれば本社ビルなどを指すだろう。つまり、この概念は、多様な具体的解釈が可能な概念である。時代の影響を強くすると、こうした多様性を見落とす危険性があると思われる。

## V 章「世界の実在構造 世界の抽象的な核層としての自然」について

この章には、自然科学の対象としての自然ではなく、世界の核としての自然が主題となるテキストがまとめられている。その自然は、具体的な経験世界から出発し、抽象化を通して取り出される、抽象的な自然（生活世界的な自然）である。本報告では、ここに焦点を当てていく。

この章ではすでに、世界は「私たちと私たちの世界」という間主観的な世界として捉えられ、意思疎通する主観性一般と周囲世界一般の関係に属するものとして、次の二点があげられている。一つ目は、「目覚めた主観性はまたさまざまな仕方で、能動的 (aktiv) な主観性であり、そうでなければならないこと」(261) である。この能動的な主観性は、「行為する主観 (handelndes Subjekt)」とも言い表されている。二つ目は、「周囲世界は単に、一般に経験作用を通して、さらに経験可能なものとして手の届くところ (vorhanden) にあるだけではなく、主観の多様な活動によってさまざまな仕方で、形成される世界であること」である (261)。この周囲世界は、能動的な主観の様々な行為を通して形成される世界であるので、「実践的周囲世界 (praktische Umwelt)」である。

この規定は、『イデー I』における規定と比較すると、その特徴が見えてくる。『イデー I』では次のように規定されている。周囲世界は、「常に私にとって『手の届くところ (vorhanden) 』にあり、私自身がその構成員である。この場合、この世界は、私にとって単なる事象世界としてあるのではなく、同じ直接性において、価値世界、財貨世界、実践的世界 (praktische Welt) として現にある」(III/1, 58)。この規定では、実践的世界とされながらも、「手の届くところ (vorhanden) 」という点、特に「vor」という点が強調されている。他方、第 39 卷の規定では、主観の能動的な行為によって形成されるという点が加えられている。この追加によって、実践的世界という大枠の規定は変わらないが、議論の力点が、「vor」という点ではなく、実践という点に移行していることがわかるだろう。

こうした実践という観点から記述される具体的な経験世界から、抽象化を通して、自然という核層が取り出される。フッサールは、この抽象化を「解体 (Abbau)」と呼んでいる。この解体では、主観的なものと非主観的なもの（例えば事物）が区別され、事物から主観的なものが捨象されていく。その主観的なものとは、具体的な経験世界において、事物が持つ「精神的述語」や「感情述語 (Gefühlsprädikat)」などのことである。精神的述語には、例えばある樹木が宗教的な価値を持つ場合のような文化的述語などがあり、感情術語には、能動的な評価（気に入る、気に入らな

い) といったものから、衝動的なもの、本能的なものまでが含まれている。この解体によって、世界の核層である自然が獲得される。

ここで注意しなければならないのは、この自然は生活世界的な自然であって、まだ自然科学の意味における自然ではない点である。この違いは、上記と矛盾するように見えるが、主観的なものにある。具体的な経験世界の解体において、主観的なものが捨象されるわけだが、すべての主観的なものが捨象されるわけではない。「私たちは純粋な自然を抽象的に取り出すことによって、純粋な自然と純粋な自然事物と絡み合う事物的-主観的なもの (Dinglich-Subjektives) の領野も、相関者として持つ」(269)。つまり、精神的述語などを捨象しても、自然の相関者である主観的なものは残ったままなのである。

このようにしてフッサールが世界の核層である自然を抽出するのは、それが世界の同一性を成すからである。解体を通して様々な述語を捨象することで、こうした述語を担いうる基体を取り出せる。その基体が、核層としての抽象的な自然なのである。確かに、世界の捉え方は文化や個人に応じて異なる。言い換えれば、異なる述語を持つ。しかし、それは、異なる基体に対する異なる述語ではなく、同じ対象に対する異なる述語なのである。「さまざまな人間、さまざまな民族などは、同じ事物（彼らによって同じものとして経験される事物）をさまざまな仕方では把握するのである」(295)。

この自然に関しては、次の VI 章にも記述があるので、その内容と合わせた問題提起を行いたい。

## VI 章「実践の人格的世界としての生活世界、実践的目標によって限界づけられた有限の認識関心の世界としての生活世界」について

この章では、前章にも見られた実践的周囲世界としての生活世界が記述されている。この時、実践は、次のような運動として記述される。「実践的関心は、そこに属する意志作用（卓越した意味での『関心』の作用）のあらゆる様態を伴って、私にとって（もしくは私たちにとって）すでに存在するもの、すでに現実的なものから、『存在すべきもの (Seinsollende)』へ向かう。ここではもちろん倫理的に語っているのではなく、純粋に意志から語っている」(324)。例えばカレーを調理する場合、私は、ジャガイモやルーなどすでに存在するものを用いて調理を行い、カレーという存在すべきものを目指す。もしカレーが完成すれば、それはもう存在すべきもの



ではなく、現実存在するものであり、調理という実践は終了する。つまり、実践は、目的を持ち、その実現に向かって進む運動であり、その目的が達成されれば終了するものである。その意味で、実践は有限性を持つ。

ただし、こうした目的は個々に存在するのではなく、目的連関として結び付けられている。カレーを作り終えれば、それを食べる。食事という行為は、食欲という根源的な欲求を満たすために行われる。この時、カレーはこの目的のための手段あるいは道具であるだろう。「目的そのものは、人間やその共同体に属する」(327)が、道具も、その目的のためのものという意味で目的を持つ。この性質は、「目的所持性 (Zweckhaftigkeit)」と言われている。

この目的所持性に、前章で確認した核層としての自然が関わってくるのだが、この時、自然概念の意味が揺れている。一方では、「自然は、私たち人間（個人あるいは共同性における人間）にとって、一般的に常に目的所持性を持つ」(327)と言われている。しかし、他方で、「人間的世界として存在する世界は、いつもすでに目的主観としての私たちから生じてきた世界である。(しかし、この世界はつねに究極の素材 (Materie) として自然という核を持つ。この自然は、産出されたものではなく、獲得物として目的所持性という性質を持たない)」(328)とも書かれている。つまり、目的所持性を持つ自然と、目的所持性を持たない自然が登場しているのである。こうした自然概念に関する記述は、『イデー II』などでも行われており、自然概念がどのような意味を持つのかを明らかにすることは、問題の一つであるだろう。

この VI 章では、生活世界は実践の人格的世界として、その実践は、すでに存在するものから存在すべきものへの運動として記述されていた。この記述の仕方は、これまで見てきた各章における記述の仕方と少し違うように思われる。これまでの生活世界の記述は、前所与性や所与性という語が示しているように、「vor」という点や、与えられるという受動的な面に焦点が当てられていた。この側面から見れば、生活世界は、学問に先立って与えられる世界、私を中心に方位付けられた仕方と与えられる周囲世界である。しかし、実践という観点から生活世界が記述される時は、反対に、能動的な面に焦点が当たっている。主観が実践を通して、生活世界を形成していく、すでにある世界からあるべき世界へ変えてゆく、そういう能動的な場面が記述されているのである。世界を変えるためには、世界があらかじめ与えられていなければならないため、この二つの側面は相関的である。世界を与えられつつ世界を変えていくという受動的な側面と能動的な側面との、このような総合関係は、生活世界を考察する上での、新しい視点の一つになりうるのではないだろうか。



## おわりに

本報告の冒頭でも述べたように、生活世界の問題圏は非常に広い。それだけ、生活世界にはさまざまな特性があるのである。その特性を列举してみると、「前所与性」「実在性」「方位付け構造」「同一性」「実践的世界」「歴史性」「地平性」「正常性」「多数性」「相対性」などが挙げられる。「前所与性」や「方位付け構造」などは、生活世界概念を扱う各テキストで、広く見られる特性である。

フッサールは、こうした生活世界の特性を「生活世界のアプリオリ」と呼び、このアプリオリを明らかにする学問を「生活世界の学」と呼んだ。この第 39 卷に収められたテキストは、その生活世界の学の成果とも言えるだろう。

この巻のテキストは、編集が年代順ではなく、主題別に行われており、編者の解釈が入り込んでいる点に注意は必要だが、この巻の公刊によって、フッサールがどのように生活世界の学を展開し、どのような成果を上げたのかが、これまで以上に見えるようになるはずである。本報告が、今後の生活世界概念の研究に一助となれば幸いである。